
ちいさな、もしも、のお話

三ツ葉るう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちいさな、もしも、のお話

【Nコード】

N3245L

【作者名】

三ツ葉るう

【あらすじ】

いつかの時代。

日本国へ遊びに来ていたアーサー・カークランドは、ふいに不可思議な出来事に見舞われる。

友人の本田菊を巻き込んだの、彼の元来の摩訶不思議がおりなす、『もしこんなことがあったら』から生まれた不思議ストーリー。

『衝撃』（前書き）

若干ボーイズラブ要素が含まれているかもしれませんが。

苦手な方は、全力で逃げてください（<―>）

色々と至らない変な文章があるやもしれませんが、どうかご容赦
ください。

楽しんでいただければ、これ以上の幸せはありません。

『衝撃』

冬も終わりを告げ、梅の花が咲き、メジロがちらほら見られるようになった。ある日。

その事件は起こった。

「ああああああアーサーさんどいてくださあああああ！
！」
「え？」

日本の家に遊びに来ていたアーサーは、自分を呼ぶ叫び声にふと上を見上げた。

どかーんゴンッ。

次の瞬間、空から落ちてきた人物に激突。
どうやら先ほどの叫びは、これを回避するためのものであったらしいが、惜しくも彼の思考がついていかなかった。

なぜ菊が空から降ってくるんだ！？

頭同士がぶつかったのか、石で思い切り殴られたかのような痛みで気が遠くなりながらアーサーは思った。

激突する前、確かに落下してきた人物が友人の本田菊であることを認識した。

だが、本来菊はこんな不可思議な事をする人物ではない。菊以外な

ら約1名思い
ついたが、確かに落ちてきたのは菊だったし、叫び声も菊のものだ
った。

「す…すいません…誠に…申し訳…」

必死に菊が謝っているのが聞こえるが、彼も頭がぐらぐらしてい
るらしく、変
な声だ。違う人物かと疑うほどの。

え？ ちょっと待てよ。これって、俺んちの法則で行くと…い
や、待て。ここは
日本だし、そんなこと…。

そこまで考えて、アーサーの意識はフェードアウトした。あまり
の頭痛に耐え
切れなくなったらしい。

『衝撃』（後書き）

完全に私の趣味で、国名ではなく個人名になってます…すいませ
ん。

最初なので短いですが…なんとか続けようと思います。
どうぞ暖かく見守ってくださいませ。

『確信』

誰かが読んでいるのが聞こえた。

「……………う……………おーい……………ねえ、大丈夫ー？」

男子にしては高めの、可愛くも聞こえる声。

ふと目を開けたアーサーに、青年は笑顔を見せた。

「よかったー、目覚めなかったらどーしようかと思ったよー」

アーサーの昔からの知り合い兼菊の友達のカエリシアーノ・ヴァルガスだ。

久々だな、こいつの顔をこんな近くで見たのは。

アーサーがそう思うのも道理だ。カエリシアーノはアーサーを怖がっているの
で、こんなに接近してくることはまずない。なのに今日は手を伸ばせば届く距離
にいる。

そんなことをアーサーが思っているとは露知らず、カエリシアーノは嬉しそう
に手に持った碗を差し出した。

「はい、これ。フランス兄ちゃんが作ってくれたんだよ」

フランスと聞いて、アーサーは思わず顔をしかめた。

アーサーとフランスは犬猿の仲という奴だ。元来馬が合わない

上に、料理の腕は自他共に認めるほど最高というスキルを持つフランスが更に気に入らないのだ。俺の料理は誰も食べてくれないのに、なんであの髭ワインの料理は世界に好まれるんだと逆恨みしているところもある（本人は絶対認めないが）。

あいつのスープを起きがけに飲むのは気が進まないが、料理に罪はない。まあいける味だしな。

とかなんとか思いながらウキウキと碗のスープを飲み干すアーサー。

本当はフランスの料理が食べたくて仕方ないのだ。そんなアーサーをにこにこ見つめ、フェリシアーノは不意にアーサーの額に手を触れた。

「!?!」

あまりの驚きに、アーサーは空の碗を落としてしまった。そんな彼に気付かないのか、フェリシアーノは普通の顔でアーサーの前髪を書き上げ、ペタリと何かを貼り替えた。

「うん、もう大丈夫だね。でも一応シップ貼っとくからねー」

「え、ちょ、シップって……?」

上ずる声でもりながら聞くアーサーにフェリシアーノは明るく
「あ、覚えてない？」と
きよとんとした顔。

「菊とアーサー、お互いに頭ぶつけて昏倒しちゃったんだよ。だからこうして、

それぞれ俺とフランスス兄ちゃんで見病してるんだよ」

そういえばそうだった、と納得しかけたアーサーは、ふと一つの可能性に行き
着いた。

普通はフェリシアーノが菊の看病で、フランススがアーサーの看病につくはず
だ。なぜならそれがいつもの組み合わせだから。

じゃあなぜコイツは俺のところ？

疑問が顔に出ていたのか、フェリシアーノが不思議そうな顔で首
をかしげた。

どう質問したものが、とアーサーが悩んでいると。

「おい、こつちも目え覚ましたぞ」

嬉しそうにフランススが部屋に入ってきた。

部屋の仕切りがふすまなのを見ると、まだ菊の家にいるらしい。

そういえば寝

ているのも布団の上だ。

きよるきよると周りを見回すアーサーにフランススはニヤニヤしている。

「それにしても、一体何してたらあんな高いところから落ちれるんだい？ しかもピンポイントにアーサーの上だろ？」

確かに菊は俺の上につきっちり落ちてきたな。何してたんだ？

ふと首を傾げ、顔にかかる髪を払おうとして、アーサーは硬直した。

髪が、黒い。

「どういうことだ！？俺の髪って金髪じゃ！？これじゃまるで東洋人……」

結論に思い当たり、盛大なため息をもらすアーサー。

つまり、彼は自分と菊の体が入れ替わってしまったという結論にたどり着いたのだ。

『確信』（後書き）

読みにくくてごめんなさい・・・。

フェリシアアーノのほわほわ感がちゃんと出ているかどうか不安です・・・。

アーサー好きの皆様、イメージを壊してしまったら本当にごめんなさい・・・。

次はちょっとシリアス系が入るかも、しれません・・・

とにかくがんばって続けたいです。

付き合ってやってください!!

『疑惑』

「どつりで違和感があったわけだ…」

ぼそりと漏らす声もアーサーではなく、しつとりとした菊の声だ。質問を無視された上にため息までつかれたフランシスはいじけたように布団の傍に座った。フェリシアーノも心配そうにアーサーの顔を覗き込む。

「菊、大丈夫？」

やっぱり。

最初に聞こえたフェリシアーノの声の「…う」は「菊」だったらしい。アーサーを怖がるフェリシアーノが近くに居て平気なのは、アーサーを菊だと思っているからだ。

これからどうしたものかと頭を抱えるアーサー。

無言でこれだけやってみせる『菊』の姿に不安を隠せないフェリシアーノとフランシス。

本物の菊なら微動だにせず全てを考えるのだが、アーサーはしばらく一人で生活していたせいで拳動も変になる癖がついているようだ。

「菊…お前やっぱり医者に見てもらったほうがいいんじゃない？」

フランシスにまで心配され、アーサーは自分が『菊』らしくないことに気付いた。

「だ、大丈夫だ…じゃなくて、です。え、と…ご心配を、おかけし

ました」

慣れない敬語で必死に返すアーサー。

まだ不審そうにしていた二人も、なんとか納得してくれたようだ。しかしいつまでもこのままという訳にはいかない。彼らにこのことを話すか、菊と相談しなくては。

そう決心したアーサーはさっそく実行に移すことにした。

「なあ…でなく、すみません、菊…でもなく、アーサーさん、はどこらっしや…るますか？」

敬語なんて何百年使っていないだろう。おかげでハチャメチャだ。あまりの不可思議な『菊』の話し方に、フェリシアーノが泣きそうな顔をした。

「き、菊がおかしくなっちゃったー！！　しっかりしてええええ！！」

体を左右に揺さぶられ、また頭痛を感じながらもアーサーは冷静に「このままじゃマジヤバイ」と自身に警報を鳴らした。

あれだ、うん。古来から俺んちに伝わるあれ使えばいいんだよな。よし。

秘技『Satanophany』！！

…ようはただの物まねである。

「ちよ、イタリアく、苦し…」

ぐわんぐわんする頭で必死に言ってみるが、フェリシアーノは完全にパニックになっている。そこまで焦るほど変な敬語だったらしい。

なのでフェリシアーノは諦め、アーサーはフランスに救済を求め目を向けた。

さすがは空気の読めるフランス。すぐに気付いてくれた。

「おいフェリシアーノ。ちょっとやめてやれ。菊が死ぬぞ」

ビクツとフェリシアーノの動きが止まる。

ようやく開放されたアーサーはゲホゲホと咳き込みつつ、（アーサーとしては癪ではあるが）『菊』としてフランスに礼を言った。

「あの、先ほどは、ちょっとまだ頭痛が治まっていなかったものですから、私としたことが、言葉遣いにまで気が廻りませんでした。申し訳ありません」

普段から菊のことをよく見ている（「深い意味はねえからな！」）アーサーのものまねは菊そのもので、ようやくフェリシアーノも安心したようだ。

よしこの調子だ俺。と内心で自分にエールを送っていたアーサーは、ふすまを開けて入ってきた人物に、思わず素で叫びそうになった。

アーサー・カーランド本人だ。いや、『アーサー』というべきか。

額に白いシップを貼り付けた痛々しい姿の『アーサー』はどっかりとフランスとフェリシアーノの間に座り、じろりとフランスを睨みつけた。

「ムサイ奴が菊の傍うるちよろしてんじゃねーよ。菊に変態がうつ

「だったらどうする」

それにフランススは傷ついた顔だ。

「あ、それひどくない？ お兄さん頑張ってお前の看病してやったのに」

「うるさい。不味いスープなんて飲ませやがって。まさか菊にも飲ませたんじゃないだろうな？」

フランススの文句を全く受け付けず自分の意見をズケズケ言い、後半はフェリシアーノに威圧感を持って聞く『アーサー』。

ひっとすくみ上がり、『菊』の後ろに隠れたフェリシアーノに、『菊』は慌てて『アーサー』を遮った。

「私もいただきました。とても美味しかったですよ」

『アーサー』はフェリシアーノに向けるのと全く異なった目で『菊』を見、「…ならいいんだ」と腕を組んで落ち着いた。

呆然とした思いで『菊』の中のアーサーはそれを見ていた。

動作も話し方も偉そうな態度も、目の動きさえアーサーだった。本人でさえ目を疑ってしまったくらいに。

今アーサーが菊である事の原因の可能性が二つに分かれてしまった。

一つは、菊のなりきりが本人も驚くほどの完成度ということ。

もう一つは、目の前の『アーサー』は本物で、今菊の中にいるアーサーが衝撃で本体から分離し、菊の意識を乗っ取り体を占領してしまっているということ。

できれば前者であってほしいが、それにしても『アーサー』が完璧すぎた。

だがもし後者であれば、早く菊を開放してやらねば精神が死んで

しまつかもしれない。しかしアーサーにはやり方がわからない。どちらにせよ、本人に確認を取る他方法はなかった。

「あの、アーサーさん。少しよろしいですか？二人で話しがしたいのです」

思い切って『アーサー』に話しかける。

彼は少し驚いた顔をしたが、素直に頷き、文句をいうフランスと怯えて縮こまったままのフェリシアーノを追い出した。

再び戻ってきてあぐらをかいた『アーサー』。少し不思議そうに『菊』の顔を見ている。

「嘘は言いたくありません。なので正直に打ち明けます」

『菊』の言葉に、神妙な顔で頷く『アーサー』。

「俺は菊じゃない。お前は、菊か？」

菊の言葉を捨て、アーサーとして聞いた。

『アーサー』は動きを止め、マジマシと見つめてくる。まるで「こいつ頭大丈夫か」と言わんばかりに。

やっぱり、俺が偽者か…

そうアーサーが諦めかけたその時。

「まさかアーサーさんがあそこまで私の真似が上手いとは思いませんでしたよ」

そう言いながら『アーサー』が笑った。その笑い方は菊そのもの

だ。

「菊…？」

思わず呟いたその声があまりにも不安げに聞こえたのか、安心させるように菊は頷いた。

『疑惑』（後書き）

遅くなって本当にごめんなさい・・・

そしてなんか微妙なところで終わってます・・・

もうだめですね私・・・

でも最後まででは書き上げたいと思っていますので、もう少しお付き合ってください。お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3245/>

ちいさな、もしも、のお話

2010年10月10日11時41分発行